

「くまもとの哺乳類」(熊本野生生物研究会編集, 2015, 東海大学出版部)

大舘 智志

北海道大学低温科学研究所

この本は熊本野生生物研究会の30周年記念出版物である。東海大学出版部という全国区の出版会社から発行されているのだが、内容は極めてローカルである。日本列島の一角を占めるに過ぎない九州の、さらにその一部の熊本県での哺乳類に関する話がメインである。正直、なぜこのようなローカルな話題の本が全国区から売り出さ

れたのか、読むまで理解できなかった。

しかし読んでいくうちに、熊本野生生物研究会の活動は、アマチュアの野生生物研究者や愛好家、そして高校生物部の活動およびその指導をする教諭にとつての、良質なモデルケースであることが分かった。そして、本書は同様な活動をしている全国の人たちにも大いに参考に



A5版 並製本 320ページ 東海大学出版部 ISBN-10: 4486037359 ISBN-13: 978-4486037354

家のネズミから、特別天然記念物のカモシカまで ▶ 九州の哺乳類55種を対象
阿蘇の野焼き、水俣病の発見も ▶ ヒトと自然のかかわりに注目
自然観察、環境教育のよみものとして ▶ 最新のトピックをやさしく紹介

なるので、全国向けの販売ということに納得した。

熊本野生生物研究会は、多くのアマチュア愛好家でみられるような自己満足の活動とは一線を画している。プロの研究者との連携を積極的に行い、「科学」としての調査活動を進めていることが大いに評価できよう。一方、プロの研究者にとっても、社会一般の理解と自分の研究成果を社会還元するにあたり、在野の研究者や愛好家との連携が必要になってこよう。自分の穴に引きこもりがちな私は、この会の活動を参照すべきであると自省した。

さて、内容であるが、基本的に1テーマが見開きで完結という読みやすい形をとっており、熊本県や九州に生息する哺乳類に関する研究のトピックが中心となっている。またトリビア的記述も満載されている。例えば、日本で非人類類人猿の「人口」がもっとも多いのは九州であるということや、弥生時代や古墳時代には日本の先進的な地域であった九州は縄文時代では人口が極めて希薄な後進地であった、ということをおは本書で初めて知った。

私自身の活動は主に北方圏や熱帯圏であるために、九州の哺乳類相については、知識の上ではある程度知っていたが、その詳しい実態については未知であった。生物地理学を研究している私は、種子島・屋久島あたりまでの九州地方は「本土」の哺乳類相の辺境地ぐらいの認識しかなく、日本列島南方については、九州を通り越して渡瀬線の向こうにある、本土とは動物相がガラリと変わ

る奄美諸島以南の琉球列島に興味が向いてしまいがちであった。本書では南西諸島の動物は範囲外なので記述はなく、熊本県を中心とする哺乳類について詳しく紹介されている。もちろん熊本県という人為的な境界線は、生物にとってはほとんど意味を持っていないので、九州の近隣県の状況も本書では説明されている。

本書ではローカルな地名が多くでてくるので、九州になじみのない私にとってはあまり実感がわかかなかったが、それはそれでそのような地域があるのだ、と新しい情報を得た気分ですらすらと読めた。そして狭い地域を扱っているということは、裏を返せば、保全や被害問題などの問題がより具体的・明示的なのでケース・スタディーとしては適切である。

ニホンジカやイノシシの増加と農林業への被害の問題、カモシカなどの希少種やツキノワグマ、カワウソ、オオカミなど絶滅種の種の保全の問題、クリハラリス（タイワンリス）などの外来種の問題など、本書ではこれらの詳細な記載があって現場のリアル感が伝わってくる。熊本県、九州以外のひとでも、その地域に根付いて活動を行っている方にもぜひ一読をお勧めする。

追記。本の帯に「くまモン」があるが、これは便乗商法であろう（笑）。そして私の知人で著者の一人である安田雅俊さんの「くまモン」についての洒落の記事が収録されている。彼の解説による「くまモン」の生物学的な論考は必読！

受付日：2015年8月25日 受理日：2015年9月5日

連絡先：大館智志

〒060-0819 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
ファックス 011-706-7142
電子メール ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp